皇學館大学研究開発推進センター紀要　第三号
平成二十九年三月一日発行（抜刷）

史料紹介

東山天皇御即位図屏風の左雙は霊元上皇の譲位移徙御幸図

所　功

史料紹介

東山天皇御即位図屏風の左雙は霊元上皇の譲位移徙御幸図

所　功

□キーワード
小原家文庫　東山天皇の御即位図屏風　霊元上皇の譲位移徙御幸
院中番衆所日記　无上法院殿御日記

一、小原利康氏収集の大礼関係資料

今上陛下は、昭和六十四年（一九八九）一月七日、父帝の崩御（朝六時半）後まもなく「剣璽等承継の儀」により践祚された。その昼すぎ、新しい元号が「平成」と定められた際、私はＮＨＫ特別報道番組の解説を依頼され、年号＝元号制度の来歴などについて説明したことがある。

それから数日後、番組を御覧になった横浜市の小原利康氏から京都産業大学に電話があり、三十年程前から収集に努めてきた大礼（即位式・大嘗祭などの総称）関係の資料を調べに来てほしいとの依頼を受けた。そこで、そのころ神社本庁にいた牟禮仁氏や國學院大學の岡田莊司氏などを誘い、数回お訪ねして概要を調べさせて頂いた。そのコレクションは、江戸時代から明治・大正・昭和に及び、多種多様に亘るが、いずれも質が高く、すでに仮目録も作られていた。

よって、翌平成二年十一月の即位式と大嘗祭に先立ち、近現代皇室研究者でもある共同通信社会部長の高橋紘氏らと企画した「即位儀礼にみる宮廷文化展」（八月～十月、全国四会場巡回）のために、小原氏所蔵の優品を数多く出展させていただいた。しかも、その後、同氏から大礼関係資料の大部分を大切に保管し有効に活用してもらえる所があれば、一括寄贈してもよいとの申し出を承った。

それは重大な案件にて、いろいろな方と相談した上で、将来のことを考えれば、私の勤務先よりも皇學館大学の神道博物館に寄贈していただくことが一番よいという結論に達した。そこで、同館学芸員の岡田芳幸氏が小原氏の所へ何度も窺い、同家からの運び出しから、受け入れ後の整理（特に詳細な目録作成）まで、一切の実務を誠実に為し遂げてくれられたことには、小原氏も十分に満足され、私としても感謝にたえない。

二、鈴鹿家襲蔵の大嘗祭資料と共に

ついで、平成元年二月二十四日、昭和天皇の御大喪に際しても、ＮＨＫ特番の実況中継に協力を求められ解説にあたった。そして翌週、大学へ出たところ、学内診療所の米田道正所長から、友人の鈴鹿長雄氏が、家蔵の大嘗祭資料や関連文書類を私に調べてほしい、と言っておられると伝えられた。

そこで早速、同僚の若松正志教授らと参上し、応接間に所狭しと並べられた資料の山を見て驚いた。「大嘗祭史料」の主要なものは、大阪教育大学名誉教授の

鳥越憲三郎氏らが写真と翻刻を柏書房から出版されていた。けれども、江戸時代の大嘗祭に実用された貴重な品々の迫力は、筆舌に尽し難い。よって、そのうちの十数点を、前記の展覧会に出して頂いた。

しかし、その全容を調査することは、私の手に負えないので、大嘗祭の研究に専念していた皇學館大学神道研究所の加茂正典氏と同神道博物館の岡田芳幸氏、および京都産業大学の若松正志氏らに協力を求めた。それから数年間、加茂氏が中心となって何十回も通い、丹念に精査を進めた（若松氏中心のグループも、関係文書を調査し、報告書をまとめている）。

そのうちに、鈴鹿家の当主長雄氏から、吉田家のもとで宮廷祭祀に奉仕してまた当家に伝わったものだから、末永く保管してもらえる所として、皇學館大学に寄託したいとの申し出があった。そこで、前記の小原家資料の寄贈と共に、鈴鹿家史料の寄託も、皇學館大学で受けてもらうことになったのである。

三、小原家から寄託の「東山天皇御即位図屏風」

こうして奇しくも即位式と大嘗祭に関する貴重な史資料が、皇學館大学の神道博物館に納まった。その一部は、岡田氏と加茂氏が調査と研究の成果を公表しつつあるが、今後さらに多くの人々に活用されることであろう。

それに先駆けて、昨年十一月、大正四年（一九一五）年の大礼から満百年にちなみ、それが東京でなく京都で行われた（昭和三年の大礼も同様）意義を、京都の人々に再認識してもらうには、大礼関係の展覧会を開くに如くはないと思い立ち、装束店井筒などの協力を得て、ようやく今秋（九月～十一月）洛南の京セラ美術館と城南宮を会場に「近世京都の宮廷文化展」を開催した。そこに出陳していただいたものは、大半が前記の小原家旧蔵品にほかならない。

しかも、それ以外にもう一点、小原家所蔵の貴重な逸品を出して貰うことができたのは、貞享四年（一六八七）の「東山天皇御即位図屏風」である。ただし、これは利康氏が収集されたのではなく、同夫人の雅子様が祖父から受け継がれたもので、その祖父様は戦前から軽井沢で旅館業を営み、そこで長らく世話をされたドイツ人の将校が、帰国の際お礼としてこの屏風を贈られたという。

そこで、小原氏は自身の収集品とは区別し、これを神奈川県立歴史博物館に預けておられた。それを平成二年の前記巡回展覧会に出して頂いたことがあるので、今秋の京セラ美術館展覧会にも出して頂けないか、同夫妻の御遺族にお願いの電話をしたところ、即座に快諾された。

よって、神奈川県立歴史博物館に連絡すると、担当の学芸部長から、たまたま同館は今秋から三年間、全面改修に入るので、寄託品などを所蔵者に返却したいと考えていた矢先だと言われた。それを御遺族に伝えて、一緒に同館へ参上した際、もしこの機会に同屏風を皇學館大学の神道博物館へ寄託して頂けないか尋ねたところ、そうしてもらえたら両親も喜ぶにちがいないと言われた。

その結果、この屏風は、十一月十三日まで京セラ美術館に展示された後、他の小原家文庫資料と共に伊勢へ運ばれた。それには、京都産業大学で「後桜町女帝宸記」（京都御所東山御文庫架蔵勅封御物）を一緒に読んできた近世宮廷文化研究者の吉野健一氏（京大修士卒）が献身的に協力してくれられた。

四、「東山天皇御即位図屏風」の右雙

この屏風は、六曲一双で、右雙も左雙も同じく縦一四〇・六cm×横三五八・六cmあり、保存状態が良く彩色も美しい。

このうち、右雙は貞享四年（一六三八）四月二十八日に挙行された東山天皇の即位式を描いたものとみて間違いない。それは幸い小原家文庫の中に「東山天皇御即位式之図」（一鋪、紙本彩色図、縦二五八cm×横二七〇cm）があり、その紫宸殿

内に据えられた高御座や調度、および同南庭に並ぶ四神旗など大小の旛などに所役の官名・姓名が詳しく記されている。これと照合すると、屏風に描かれる所役配置も官名・姓名の注記も、ほぼ完全に一致する。

その上、右の「東山天皇御即位式之図」には書かれていないが、この屏風には高御座の八角屋形内に少年天子、その壇上右奥に摂政が描かれている。これは、数え十三歳で即位された東山天皇と三十六歳で摂政となった一条冬経、とみて間違いないであろう。

五、霊元上皇から東山天皇への剣璽渡御

一方、左雙は、牛車を先頭に描いた行列図である。そして、平成二年の『即位儀礼にみる宮廷文化展』の図録に「資料解説」を國學院大學の西牟田崇生氏に執筆をしてもらった段階では、これを「霊元上皇から東山天皇へ剣璽（三種の神器のうちの剣璽）渡御の行列図」と推定している。

そこで、今秋の「近世京都の宮廷文化展」用パンフレット「展示品解説」にも同趣の説明を載せた。しかしながら、会期の途中に疑問が湧き、現在勤務しているモラロジー研究所で宮内省編『天皇皇族実録』近世篇（ゆまに書房、平成十八年刊、東大史料編纂所WEB公開）を調べた。

すると、『東山天皇実録』貞享四年三月二十一日条に、東山天皇が霊元上皇より「土御門内裏（現在の京都御所と同じ場所）ニ於テ受禅アラセラル。」との綱文を立て、左大臣（のち関白）近衛基熙（四十歳）の『基熙公記』から、次のような記事を引いている（刊本四九～五〇頁、傍点・句読点・返点等は引用者、以下同、尚ⓐとⓑの間の「即位室令」省略）。

ⓐ一、剱璽渡御行列大概如レ此、

左衛門府、府生 志 尉 権佐輔長 府生 志 尉 佐員従朝臣 督隆眞卿

左兵衛府、府生 志 尉 権佐時香朝臣、督兼連朝臣〔以上巻纓／綏帯二弓箭一〕

公卿、式部權大輔、裏松宰相、花山院中納言、新源中納言、姉小路中納言、正親町中納言、權中納言、醍醐大納言、萬里小路大納言、源大納言、今出河大納言、内大臣、右大臣、余（基熙）公卿悉歩二列一 筵道左方一

左右近衛、近衛 府生 近衛 府生 將曹 將監 將曹 將監 右少將博意朝臣 左少將季祿朝臣 右中將實陰朝臣 左中將爲綱朝臣 公晴朝臣 隆安朝臣 爲經朝臣 雅豊朝臣 右大將 左大將 卷纓 同右 老懸縫腋弓箭、大將、

寶、剱 雅博王、神、璽 基輔朝臣 實久朝臣〔兩人行二筵道上一、各淺沓〕 關、白 淺沓歩二、筵道上一 鈴、

少納言行豊朝臣、漏剋、賀茂友親、版位、中務少輔職永、内豎康布 歩二筵道左一

右兵衛府、督 隆慶卿、佐尹隆、尉 志 府生 尉 志 府生

右衛門府、督 時成卿、權佐輝長、尉 志 尉 志

辨、詔光朝臣、外記、師庸朝臣、史、季連宿禰、史生、官掌

ⓑ一、抑今度剱璽渡御之事不レ得二其意一。當時稱二新帝御所一者爲二中宮御所一。去正月東宮移御之後、中宮令レ退二出里御所一給。而舊主新帝同殿歟。當時中宮御所禁裏槨内也、如レ此時、内々以二内侍一被レ渡二剱璽一古今之定例也。且又於二新帝作法一者、卽舊主御所、紫宸清涼等之殿不レ改二御装束一而被レ行レ之。舊主新主御在所難レ辨之、加此剱璽廻槨外條不レ知二其子細一。世間之人知不レ知共以難二此事一。出二叡慮一歟。爲二關白一指南歟、不レ知二其源一、又依レ爲二同殿儀一賢所無二渡御一、子細爲二參差一者歟。凡當時之體一向雖レ緘レ口恥後代嘲哢而已。又今日供奉人々經二閑道一歸參之路、昨日俄中宮與二禁裏一ノ中垣ヲ破、對二屋下屋等一經二左道之閑路一歸參了。不可説々々。

このうち、ⓑによれば、そのころ「旧主」霊元上皇と「新主」東山天皇は、禁裏構内の「中宮御所」に同殿しておられたから、かような時は、内侍の手で「剱

東山天皇御即位図屏風の左雙は霊元上皇の譲位移徙御幸図（所）

璽を渡御」されるのが「古今の定例」だという。

しかしながら、ⓐによれば、当日「剣璽渡御行列」が行われ、公卿と関白の間に、雅光王の捧ずる「宝剣」と、持明院基輔・正親町三条実久の棒ずる「神璽」が並ぶ行列となっている。けれども、これでは屏風左雙の行列と全く合わないから、それを剣璽渡御の行列図とみることはできない。

六、左雙は霊元上皇の譲位移徙行列

そこで、一たん行き詰まり、展覧会実行委員の吉野健一氏と会って話すうちに、これは右雙に描かれる四月二十八日の即位式を見物するため、霊元上皇が仙洞御所から内裏へ御幸された際の行列を描いたものかもしれないと仮定した。しかし、『霊元天皇実録』の同日条（刊本四七四頁）をみても「東山天皇ノ御即位ニ依リ禁裏ニ御幸アラセラル」との綱文を立てて『院中番衆所日記』を引くが、その行列次第は屏風の左雙と一致しない。

よって、再び考え直すため、霊元天皇と東山天皇の『実録』を通覧したところ、三月二十一日（譲位）と四月二十八日（即位式）の間の三月二十六日条（前者刊本四六二～三頁）に、霊元上皇が「仙洞御所ニ移徙アラセラル。……。」との綱文を立て、『院中番衆所日記』を引く中に、次のごとく記されている。

ⓒ貞享四年三月廿六日、快晴。今日仙洞御移徙御幸也。巳刻入御、兼日當日之儀、藏人右中辨頼重奉行之、禁中之儀不レ記レ之。先出車一兩入二四足門一寄二弘御所東面一。車寄假庇打板兼設レ之。次供奉殿上人入二同門一列二立西側一。北上東面。次公卿入二中門一列二立北側一。北上東面。次寄二御車於弘御所之南階一。階隱之間、御車寄設レ之。御車過二御於殿上人・公卿等前一之時、各蹲居。下二御於御車一入二御于簾中一。女中供奉。供奉之公卿以下經二本路一退下、於二便所一有二御粥一獻之儀一。

ⓓ　路頭之儀

童子二人、舎人二人、各二行。出車、車副二人、榻持、棧持、掛杖持、雨皮持、各二行。／殿上人藤原兼仍、小隨身　沓持　笠持　清原宣通、布衣　沓持　笠持　兼成、同　同　同　實松、小隨身　同　同　徳忠、布衣　同　尹隆、小隨身　同　相起、布衣　同　宣定、同　同　同　隆長小隨身　同　同　輔長、同　同　季盛、同　同　頼重、布衣　同　公光朝臣、小隨身　同　兼供朝臣、布衣　同　公前朝臣、小隨身　同　實字朝臣、同　同　公晴朝臣、同　同　隆安朝臣、同　同　爲經朝臣、同　同　行豊朝臣、布衣　布　同　時方朝臣、同　同　兼連朝臣小隨身　同　俊方朝臣、布衣　同　基勝朝臣、小隨身　同各二行／公卿、小隨身　實久朝臣、小隨身　沓持　笠持　如木　裏松宰相、布衣　沓持　笠持　小隨身　右衛門督、小隨身　沓持　笠持　諸大夫同衛府長新源中納言、布衣　同　沓持　笠持　諸大夫同衛府長新源中納言、布衣　同　沓持　如木　如木　姉小路中納言、布衣　同　沓持　如木　正親町中納言、布衣　同　沓持　如木　諸大夫同衛府長醍醐大納言、布衣　同　沓持　如木　萬里小路大納言、布衣　同　沓持　諸大夫同、隨身　同　同　左大將同　番頭　同　同　沓持　笠持　同　諸大夫同、隨身　同　同　右大臣、隨身　隨身　同　沓持　笠持　御隨身、藤原武濟　下毛野武有　身人部清昌　源　身人部清定　武矩　秦　身人部清定　武重　子　童　子　同　同　舎人　同／御車、御車副　同　同　同　同　同　棧持　榻持　掛杖持　雨皮持　下臈隨身、秦　武　和藤原　信　秦　身人部清高　武貞　身人部重長　下毛野武辰　廳官、正直　召次、藤原勝久　大神景村　多　久音　藤原宗益　紀　氏親　宗岡季行　御　友　庶別當諸大夫同衛府長今出川大納言、布衣　同　沓持　笠持　御後官人、看督長　看督長　火長　火長　章成、沓持　笠持　諸大夫、同、同、同同　隨身　同　同　攝政、同　同　同　同　番　頭八人群行、

このうち、ⓒによれば、霊元上皇は「禁中」から「仙洞御所」へ「移徙御幸」のため、「御車」に乗って「弘御所」に入られた。その仙洞（院）御所は、『基熙公記』同日条（刊本四六五頁）に「院御所者、後水尾院御在所、年来為二東宮御所一、今度少々従二武家（幕府）一御殿等被二造添一。」とみえ、現在の京都御所の東南にある大宮御所の南空地に、その名残を留める。

また⓭によれば、この移徙御幸の「路頭」行列は、「出車」を先頭に、「殿上人」二十四人と「公卿」十二人が各々随身らと並び、その後に上皇の「御車」が続き、末尾に「庁官」や「摂政」などが従っている。

これを、屏風の左雙に描かれる行列の次第と対比するに（佐野真人氏に現物を再確認してもらった）、一致している。

まず右下の「四足門」に立派な「出車」が入ろうとしている。ついで「殿上人」が二列で十二組・二十四人、および「公卿」が一列十一組・十二人が随身らと並び、さらに左上の御門前辺りから後に「御車」（檳榔毛の牛車）が続き、末尾に「摂政」の姿も見える。全体として⓭の記録と符号するので、これは霊元上皇が譲位されたときの行列図と推断してよいと思われる。

七、屏風の作成と行列沿道の描写

しからば、この屏風はどのようにして作成されたのだろうか。その情報は屏風に何も書かれていない。けれども、今秋の展覧会の展示実行に最も貢献した前記の吉野健一氏が、十一月六日の京セラ美術館における講演会で、この屏風について詳しく解説し、次のような参考資料を紹介された。

貞享四年十一月朔日丙子、はる丶（晴）。本院（霊元上皇）より御しよく（即）位のづ（図）、くはしく（詳）かゝせ（画）あげらるべきよし（上）、左府（近衛基熙）へ仰にて、……けふ（今日）、わが身（基熙正室の常子内親王）もちてまい（持）る（参）。御きげん（気嫌）の事也。しほらしく絵にかき（画）て何も〳〵こまかに（細）かゝせ（画）あげられ、しゆびよく（首尾）御前も御にぎ〳〵（賑々）しさ、女中衆もうちよりながめ（眺）給ふ。ことのほかまんぞくがり（満足）也。……。

右の記事は、左大臣近衛基熙の正室であり、後水尾天皇の第十五皇女（品宮・无上法院）常子内親王（四十六歳）が綴られた『无上（むじょう）法院殿御日記』（東大史料編纂所本）にみえる（『明正天皇実録』刊本三〇二頁所引）。

これによれば、東山天皇（十三歳）即位式が四月二十八日に行われた後、霊元上皇（三十四歳）が近衛左大臣（四十歳）に「御即位の図」を詳しく画いて上進するよう仰せられた。それから約半年後の今日出来あがってきたので、常子内親王が異母姉明正上皇（六十四歳）のもとへ持参したところ、大いに満足げであったという（その後、霊元上皇のもとへ届けられたか）。

ただ、厳密に思えば、常子内親王が持参したのは「御即位の図」であるから、それが当屏風の右雙だとしても、霊元上皇の「仙洞御所移徙御幸」を描いた左雙は、別の経緯で作成されて、結果的に一対となったのかもしれない。

この左雙で興味深いのは、行列の沿道に市井の人々が座り見物をしていることである。袴を着た男性のみならず、僧侶も婦人も幼い子供までも見受けられる。これが実際にありえたことは、『基熙公記』同年四月二十八日（即位式当日）条に、「宸儀（天皇の御姿）初見〔……南門外雑人如二雲霞一。階下次将称二警蹕一歟。其声不二分明一。……〕」という騒がしい状況だったという。これより六〇年近い前（一六二九）の明正女帝の御即位式図屏風などにも描かれているように、京都の庶民にとって、宮廷の儀式や行列は、楽しみな見物の対象だったのであろう。

尚、屏風の確認や校正などに尽力された佐野真人氏に感謝の意を表する。

（平成二十八年十二月二日稿）

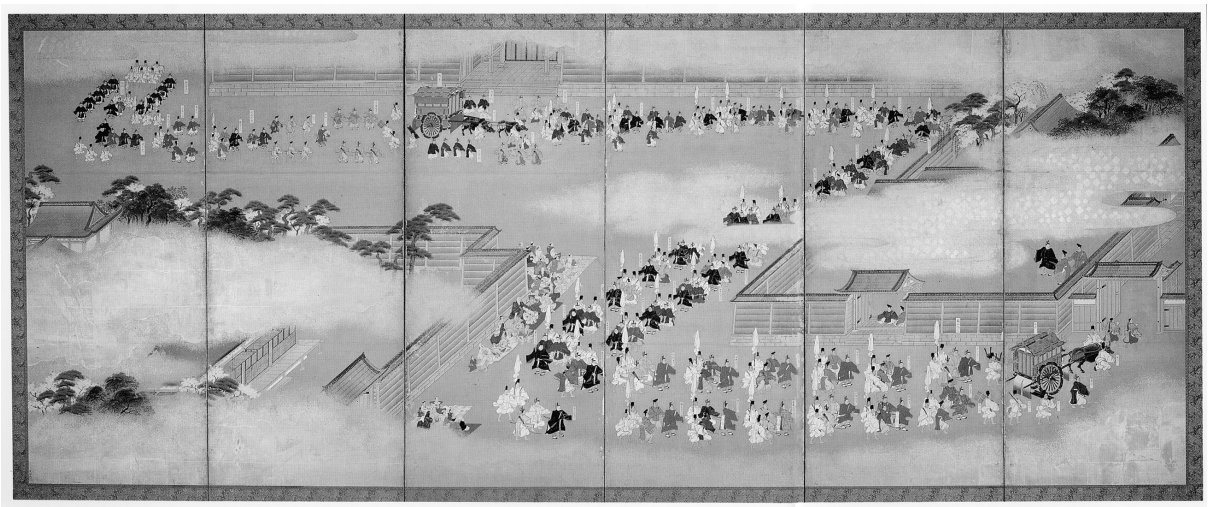
参考文献（宮内省編『天皇皇族実話』以外）

1、所　功編『古式に見る皇位継承儀式宝典』（平成二年、新人物往来社別冊歴史読本）
2、井筒雅風他監修『即位儀礼にみる宮廷文化展』図録（平成二年、共同通信社）
3、皇學館大学 佐川記念神道博物館編刊『小原家文庫資料目録』（平成二十二年）
4、森田登代子著『遊楽としての近世天皇即位式』（平成二十七年、ミネルヴァ書房）
5、吉野健一「御即位図屏風を読み解く」（平成二十八年、京セラ美術館講演会レジュメ）
6、瀬川淑子著『皇女品宮の日常生活―『无上法院殿御日記』を読む』（平成十三年、岩波書店）

（ところ　いさお・京都産業大学名誉教授　モラロジー研究所教授　本学特別招聘教授）

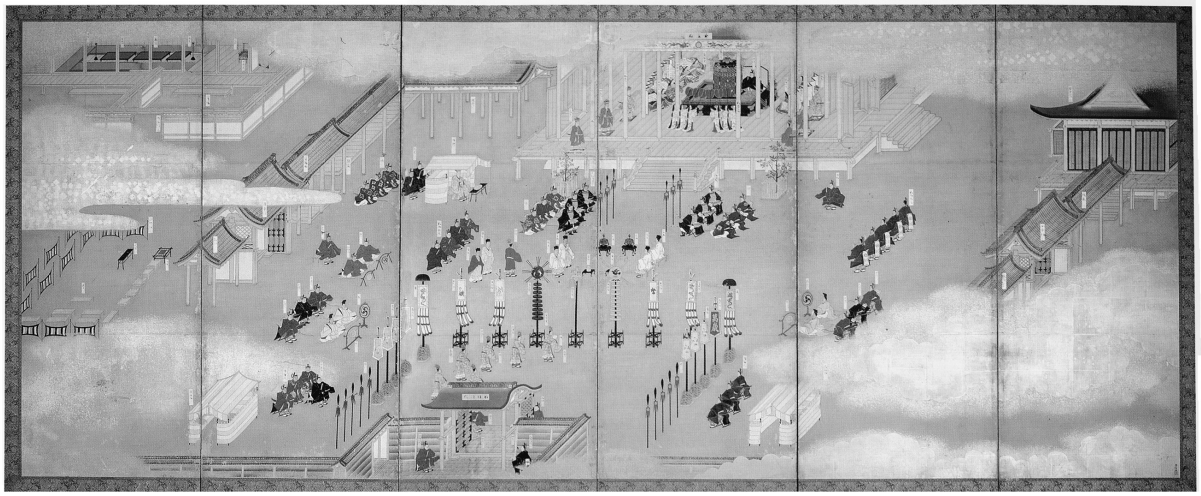
東山天皇御即位図屏風の左雙は霊元上皇の譲位移徙御幸図（所）

（上部：御車）　　（下部：出車）



屏風左雙：霊元天皇、貞享４年（1687）３月21日、譲位により仙洞（上皇）御所へ移徙の行列

（下部：承明門）　　（上部：高御座）



屏風右雙：東山天皇、貞享４年（1687）４月28日、紫宸殿と南庭で挙行された即位式の全景